

防災教育における教員の指導に関する一考察

～高等学校での「抜き打ち避難訓練」の効果と学校安全～

国 吉 恵 一
藤 原 靖 浩

要 旨

本研究では、千葉県高等学校において実施した「抜き打ち避難訓練」の効果について教員や児童生徒を対象にしたアンケート調査から検討することで、防災教育の実施に当たって教員に求められる指導について考察する。調査の結果、具体的な安全確保の行動を確認するに留まっていた従来の防災訓練では不十分であった実践的な避難行動を行うことができ、子どもの災害への日常的な対策に関する意識の醸成や、災害時の適切な判断力の育成にも貢献することができたことが確認された。また、アンケートの結果からは、突発的な災害の発生に向けて教員が日常的に防災教育の意識を高めておく必要性が示唆された。この結果を受けて、今後の高等学校における教育方法や教員の指導について考察する。

キーワード：学校安全，防災教育，安全教育，抜き打ち避難訓練，教育方法

1. 問題と目的

1995年の阪神・淡路大震災，2011年の東日本大震災，2016年の熊本地震，最近では2018年9月に北海道で発生した北海道胆振東部地震による液状化による道路の陥没や土砂災害など，日本では地震による被害が後を絶たない。また，台風や大雨，火山の噴火など，多くの自然災害の事例が確認されている。特に，2018年は台風による被害も大きく，これまでにない進路をとった台風や数十年に一度と言われる勢力の台風が発生し，関西地方を中心に大きな被害が出たことは記憶に新しい。筆者は平成最後の2018年がまさに「災害元年」と考えている。これまでにない未曾有の災害が連続して起こった年として，今後も記録されていくことは間違いない。そして，このような災害は，いつどこで生じるか予測することが難しく，常に防災や安全を意識しておくことが求められている。さらに，数十年以内に発生すると予測されている南海トラフ地震は，近畿地方や四国地方だけでなく全国的な課題として掲げられている。このような状況の中，学校では防災教育の充実が喫緊の課題となっている。

学校教育において，防災教育は「学校安全」の一部に位置付けられている。学校安全は，学校保健，学校給食と並ぶ学校健康教育の一領域であり，「安全教育」と「安全管理」という2つの側面からなる。安全教育は，安全に関する基礎的・基本的事項を系統的に理解し，思考力，

判断力を高めることによって安全について適切な意志決定ができるようにすることを目指す教育活動であり、理科や社会科、保健体育科、特別の教科道徳、総合的な学習の時間、特別活動などさまざまな領域や教科などにおいて学校種の枠を超えて行われるものに位置づけられている。そして、各学校では地域の実態にあった防災教育を実施しており、「防災教育実践事例集」¹⁾などの形で広く紹介されている。しかしながら、学校における防災教育には課題も山積しており、中でも「避難訓練」は学校によって大きな差が見られる防災教育である。一般的に、従来までの避難訓練では、授業時間中に「地震が発生しました」という校内放送が流れ、机の下に隠れた後、「地震が収まりました。校庭に避難しなさい。」と再度放送が流れる。そこで、すべての児童生徒や教師が廊下に整列し、校庭や体育館に集合するのである。集合した後は、私語の注意、避難までに何分かつたかを強調する。このような避難訓練は多くの学校で実際に行われているものであるが、実施の過程から評価に至るまで多くの課題が見られる。このような避難訓練の課題の指摘は、学校における実践的な防災訓練を提唱している秦康範によって「児童生徒に対する実践的防災訓練の効果測定」²⁾などの先行研究で示されている。地震や火災など、実際に体験することが難しい災害に対しての防災教育では、児童生徒の活動に臨む姿勢や態度に積極性が見られないことも少なくない。だからこそ、児童生徒の危機管理意識の醸成は、防災教育の重要な課題の1つと言えるだろう。また、同時に児童生徒に指導を行う教師一人一人の危機管理意識を醸成することも不可欠である。特に、若手教員が増加し、30代、40代、すなわちミドルリーダー層の教員が少なくなっている現在の学校教育現場では、防災に関する教員研修を充実し、教師自身が日常的に防災意識を高めておく取り組みが必要である。

上記のような課題を踏まえて、本研究では学校における「抜き打ち避難訓練」に着目した研究を行う。抜き打ち避難訓練は、秦康範が考案した実践的な避難訓練であり、学校だけでなく病院などの施設でもすでに複数回に渡って実施され、大きな成果を挙げていることが報告されている。³⁾

本研究では、この抜き打ち避難訓練を千葉県の高등학교において実施し、その効果について、教員や児童生徒を対象にしたアンケート調査から検討することを通して、防災教育の実施に当たって教員に求められる意識や指導、高等学校における今後の実践的な教育方法について考察する。

2. 学校安全と防災教育の理論的背景

文部科学省は阪神・淡路大震災後の1995年と1996年に「学校等の防災体制の充実について」を報告し、災害時に学校が果たす基本的な役割や児童生徒の安全確保、情報連絡体制の充実といった内容を取りまとめた。次いで、2011年の東日本大震災後には、『「生きる力」を育む防災教育の展開』⁴⁾を発行し、学校における防災教育では、児童生徒一人一人の防災意識を育む

ところにまで範囲を拡大させることが示された。2012年の「実践的防災教育総合支援事業」では、各都道府県、市町村それぞれにおいて想定される災害への対策を踏まえた指導方法の開発と普及、学校防災アドバイザーの活用などを行うことが求められるようになり、児童生徒の災害への理解を深めることや日常的に災害に備える態度の育成が重要であるとされている。

文部科学省は、これらの内容を踏まえて、2012年4月には『学校安全の推進に関する計画』を閣議決定した。⁵⁾ これは2009年の「学校保健安全法」⁶⁾の第三条で示された「国は、各学校における安全に係る取組を総合的かつ効果的に推進するため、学校安全の推進に関する計画の策定その他所要の措置を講ずるものとする」という内容を受けて、2017年までの5年間で総合的かつ効果的な学校安全に係る取り組みの推進を目指したものである。この計画で示された学校安全を推進するための方策は、「安全に関する教育の充実方策」「学校の施設及び設備の整備充実」「学校における安全に関する組織的取組の推進」「地域社会、家庭との連携を図った学校安全の推進」という4つの大きな枠組みの中で、自然災害だけでなく情報社会への対応や事件・事故災害など、広く社会全体で取り組んでいくことの必要性を訴えていたのである。その中で避難訓練は「安全に関する教育の充実方策」の中に盛り込まれ、計画の本文には「教育手法の改善」として次のように示されている。

「保健体育等の授業時間中に教科書などを使って系統的、計画的に行われており、その充実を図っていくことは今後も必要である。講話を聞くことに加え、その知識や態度を定着させ、更に行動にまでつなげていくためには、例えば、実際に学校内での危険箇所を探す、通学途中の危険箇所を確かめる、自転車の点検や安全な乗り方を練習する、地震が起きたことを想定して避難訓練をする、自動体外式除細動器（AED）を実際に使用するなどの発達の段階に応じた体験的な学習が有効である。」⁷⁾

このような体験活動を重要視する教育手法（教育方法）のあり方は「主体的・対話的で、深い学び」を掲げる新学習指導要領につながるものであった。

2016年12月に中央教育審議会初等中等教育分科会において提案された『次期学習指導要領にむけた「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(案)』⁸⁾でも、時代の変化という「流行」の中で未来を切り拓いていくための力の基盤の育成、コミュニティ・スクールなどの推進による学校と地域の連携・協働を広げることの必要性などの新たな指摘に加えて、防災等に関する学習の充実を行うことが明記されており、防災教育を一層促進していくことが学校教育の課題の1つとなることが示されたのである。このような国の方針を受けて、学校ではさまざまな領域や教科の中で、防災教育を取り入れ始めた。しかしながら、これらの防災教育において、現在、避難訓練が1つの課題になっている。

前述のように、従来までの避難訓練では授業中に地震が発生し、机の下に隠れた後、校庭や体育館に集まるといった一連の行動をパターン化することを徹底している。このような訓練は、避難訓練の基本的な型を身に付けさせることには効果的であるが、日時が事前に児童生徒に知られていることで、それ以上の効果を望むことは難しくなっている。従来までの避難訓練は、ほとんどの場合、教師主導で行われている。そのような訓練では、新学習指導要領が目指す児童生徒の主体的な態度の育成には不十分であることもすでに指摘されている。⁹⁾ また、山梨県で抜き打ち避難訓練を実施している秦は「従来の指導方法にこそ問題があり、教師の意識改革が不可欠である」¹⁰⁾ ことを指摘している。学校は年間指導計画など、事前に決められた内容に即して教育活動を実践しており、学校行事などでも前年度までの内容を踏襲することが多い。これは教師の負担を減らすという目的でもあるのだが、それゆえに新しいことを受け入れるという抵抗も決して小さいものではない。特に、高等学校では、防災教育の実施率は決して高くはないと考えられる。これは、山口県の公立の小・中学校、高校に防災教育に関するアンケート調査を実施した村山・八木の研究で、山口県内において教科教育や特別活動などで防災教育を行っているのは、小学校がほとんどであり、中学校ではその割合が下がり、高校では半数以下となることが指摘されたこと¹¹⁾ や、秦の事例でも積極的に防災教育に取り組んだ事例の多くは、小学校・中学校に留まっていることなどを見ても、高校では「防災科」などの特別な学科を設置していない限り、未だ防災教育は不十分であると言わざるを得ない。

高校においても従来の避難訓練はほぼすべての学校で行われている。しかし、高校の避難訓練の事例を調査しても、抜き打ち避難訓練のような実践的な内容を実施している学校は見受けられず、災害の映像を見て、その対策を考える授業や、地域の防災マップを作成するといったものに留まっている。これらは知識を得る、思考するという点では一定の効果があると考えられるが、実際の場面でどのように活かすことができるかという面からみれば、実際の災害が起こるまで評価することができない。

このような状況を改善するためには、高等学校でも今以上に実践的な訓練を導入していくこと、教師が防災教育の実践的な指導力を身に付けていくことが不可欠であり、本研究で取り上げる高等学校での抜き打ち避難訓練はその先駆的な事例になると考えられる。これを踏まえて、次章では、千葉県内の公立高校で実施した抜き打ち避難訓練について述べる。

3. 千葉県の公立高校における抜き打ち避難訓練

千葉県は2008年から『防災誌』を発行し、「減災」という観点から過去に千葉県に大きな被害をもたらした災害を県民に周知する取り組みに力を入れている。¹²⁾ その他にも、県下の地震防災地図の作成、地震防災ガイドの作成、地域防災計画に基づいた環境整備など、防災に関する事業を積極的に推進してきた。さらに、東日本大震災での被害を受けて、県が独自に『東日

『本大震災の概要（パンフレット）』を作成し、被害の状況や教訓を取りまとめ、「自助・共助」をテーマにした取り組みを進めている。このような県を挙げての防災対策に取り組んでいる千葉県は、防災に向けた意識が他の都道府県と比べて高まっていることが予想される。それゆえに、抜き打ち避難訓練のような新しい体験活動に対する学校側の理解が得られると考えられた。また、筆者である国吉は、千葉県内において長く公立の高等学校に勤務し、学校保健や生徒指導に携わっていた経験から千葉県内の防災教育について理解が深く、東日本大震災の際には勤務校で液状化現象への対応や災害時のマスクミ対応などを行った経験がある。それゆえに、千葉県内では抜き打ち避難訓練を試行的に実践する基盤があると判断するに至った。

さて、本研究で抜き打ち避難訓練を実践したのは千葉県内にある公立高校（以下、K高校）である。K高校は各学年4クラスの学校であり、市内でも上位の偏差値の高校である。創立60年以上の歴史ある学校で、地域ではいわゆる拠点校で、問題行動を起こす生徒もほとんどいない。また、服装・頭髪指導の問題などもほとんどなく、比較的落ち着いた学校である。なお、K高校での抜き打ち避難訓練の実施は、事前に教育委員会及び管理職との打ち合わせを行っていたものの、訓練の実施そのものが短期間で決定されたものであったことを追記しておく。実施手順については、以下の通りである。これは、先行研究を参考に管理職との打ち合わせの下、K高校の実態に即した独自のプランを作成した。

手順1

（教師向け）

朝の職員打ち合わせにおいて抜き打ち避難訓練が実施されることを周知し、1日の中でどの時間帯で避難訓練が実施されるか分からないと伝える。

（生徒向け）

期末テストの返却日に設定されている3日間の内でいつやるかわからないことを各学級担任を介して事前に伝える。

手順2

（全体）

初日の2時間目と3時間目の休み時間に入って5分後に非常用のベルを鳴らす。

手順3

（全体）

教頭が緊急アナウンスを放送した後、揺れへの初期対応を各個人の判断で行う。

手順4

(生徒向け)

天候不良の予報が出ていたため、グラウンドではなく体育館へ集合する二次対応を実践する。

(教師向け)

それぞれに決められた災害時の役割を果たし、終了後に各自で体育館へ集合する。

手順5

(全体)

訓練終了後、教師と生徒を対象に質問紙調査を実施する。

抜き打ち避難訓練当日の様子は以下の写真の通りである。

写真1は教室前の廊下を生徒たちが個々人で避難する際のものであり、写真2は机の下に潜っている際のものである。写真1からも分かる通り、生徒はそれぞれの判断で行動することが求められている。また、訓練終了後のアンケート調査は次のようになっている。

生徒用のアンケート用紙では、①学年、②性別、③-1地震速報が聞こえた時にいた場所、③-2人数、③-3最初にした行動、③-4その際に感じた危険、③-5速報を聞いた時の気持ち(複数回答可)、④これまでの避難訓練の経験(自由記述あり)、⑤抜き打ち避難訓練の実施に対す



写真1 教室から避難する生徒



写真2 机の下に隠れる生徒

抜き打ち防災避難訓練振り返りシート 生徒用

本日は、「抜き打ち防災避難訓練」にご協力をいただきありがとうございました。この避難訓練は生徒や教職員の防災意識を日常的に高めることを目指して行っています。今後の発展のために以下の調査にご協力をお願い致します。なお、このアンケートは皆さんに記入して頂いた後、すぐにコンピュータに入力して処理しますので、誰が何を回答したのか他人に知られることはありません。また、このデータは研究以外では使用せず、データ入力後は厳重に管理致します。

研究代表者：国吉恵一（京都産業大学現代社会学部准教授）
研究協力者：藤原靖浩（大阪市立大学特任講師）
連絡先：075-701-0352（直通）、koyoshi@cc.kyoto-su.ac.jp

- あなたの学年は？
① 1年 ② 2年 ③ 3年
- あなたの性別
① 男 ② 女 ③ その他、答えたくない
- 地震速報（警報）が聞こえた時のことについてお答えください
(1) あなたはどこにいましたか？
()
(2) あなたは何人でしたか？
① 1人 ② 2人 ③ 3人 ④ 5人以上 ⑤ 10人以上
()
(3) 地震速報（警報）が聞こえた時、最初に何をしましたか？
()
(4) その場所にはどんな「危険」があると感じましたか？
()
(5) 地震速報（警報）が聞こえた時、どのような気持ちでしたか？【出てはまるものにくつでも○をつけてください】
① 驚いた ② あせった ③ 何をしていたか分からなかった
④ 不安になった ⑤ わくわくした ⑥ その他 ()
- あなたは「抜き打ち防災避難訓練」や、同じような訓練を経験したことがありますか？
① 経験したことがある ② 経験したことがない
①と回答した方にお聞きします。それはどのような訓練でしたか？
()
- 「抜き打ち防災避難訓練」を実施することをお考えですか？
① 賛成 ② 反対 ③ どちらとも言えない
(理由)
- あなたはクラス内で災害時に決められた役割がありましたか？
① ある（内容： ） ② ない ③ わからない

生徒用アンケート用紙（表）

「抜き打ち防災避難訓練」振り返りシート 職員用

本日は、「抜き打ち防災避難訓練」にご協力をいただきありがとうございました。この避難訓練は生徒や教職員の防災意識を日常的に高めることを目指して行っています。今後の発展のために以下の調査にご協力をお願い致します。なお、このアンケートは皆さんに記入して頂いた後、すぐにコンピュータに入力して処理しますので、誰が何を回答したのか他人に知られることはありません。また、このデータは研究以外では使用せず、データ入力後は厳重に管理致します。

研究代表者：国吉恵一（京都産業大学現代社会学部准教授）
研究協力者：藤原靖浩（大阪市立大学特任講師）
連絡先：075-701-0352（直通）、koyoshi@cc.kyoto-su.ac.jp

- あなたの勤務校
① 小学校 ② 中学校 ③ 高等学校 ④ 特別支援学校 ⑤ その他 ()
- あなたの性別
① 男 ② 女 ③ その他、答えたくない
- あなたの年齢
① 20代 ② 30代 ③ 40代 ④ 50代以上
- あなたの立場
① 管理職 ② 教諭 ③ その他 ()
- これまでの教諭（その他）としての経験年数
計 ()年
- 地震速報（警報）が聞こえた時のことについてお答えください
(1) あなたはどこにいましたか？
()
(2) あなたは何人でしたか？
① 1人 ② 2人 ③ 3人 ④ 5人以上 ⑤ 10人以上
()
(3) 地震速報が聞こえた時、最初に何をしましたか？
()
(4) その場所にはどんな「危険」があると感じましたか？
()
- 災害時のあなたの「役割業務」は何でしたか？
()
- あなたは「抜き打ち防災避難訓練」または類似した訓練を経験したことがありますか？
① 経験したことがある ② 経験したことがない
①と回答した方にお聞きします。それはどのような訓練でしたか？
()

職員用アンケート用紙（表）

- 災害時には物が「倒れてこない」「落ちてこない」「動いてこない」場所でも、姿勢を低くして机や机を守る行動をすることが大切です。下の項目の中で、できたと思うものは○、できなかったと思うものは×をつけてください。

チェック項目	○・×
ものが倒れてこない・落ちてこない・動いてこない場所を見つけて、移動できましたか？	
姿勢を低くすることはできましたか？	
自分の頭や体を守ろうとしましたか？	
他人のことを気づかう、他人に声をかけるなど、誰かのために行動することができましたか？	

- 「抜き打ち防災避難訓練」と、今まで通りの決まった時間にベルが鳴る訓練とのちがいは何だと思いますか？
()
- 高等学校では「抜き打ち防災避難訓練」が小・中学校よりも実施率が低いと言われています。その理由はなぜだと思いますか【出てはまるものにくつでも○をつけてください】
① 高校生には授業が一番大切だと思う ② 真剣に訓練に参加しない
③ 訓練のための時間を確保することが難しい ④ 想定できない内容に不安がある
⑤ 今まで通りの避難訓練で十分である ⑥ 面倒である
⑦ 先生や生徒の負担が大きい ⑧ 高等学校で行う必要性を感じない
⑨ その他 ()
- 今回の「抜き打ち防災避難訓練」でよかった点、悪かった点を教えてください。
(よかった点)
(悪かった点)
- 今後どのような「防災訓練」が必要だと思いますか？（お気づきの点があれば教えてください）
ご協力ありがとうございました。質問は以上です。

生徒用アンケート用紙（裏）

- 「抜き打ち防災避難訓練」と、従来の決まった時間にベルが鳴る訓練とのちがいは何だと思いますか？
()
- 「抜き打ち防災避難訓練」を実施することをお考えですか？
① 賛成 ② 反対 ③ どちらとも言えない
(理由)
- 高等学校では「抜き打ち防災避難訓練」が小・中学校よりも実施率が低いと言われています。その理由はなぜだと思いますか【複数回答可】
① 授業時間の確保が先決だから ② 真剣に訓練に参加しない
③ カリキュラム上の時間確保が難しい ④ 想定できない内容に不安がある
⑤ 従来のような避難訓練で十分だから ⑥ 面倒である
⑦ 教職員の負担が大きい ⑧ 高等学校で行う必要性を感じない
⑨ その他 ()
- 今回の「抜き打ち防災避難訓練」でよかった点、悪かった点を教えてください。
(よかった点)
(悪かった点)
- 今後どのような「防災訓練」が必要だと思いますか？（その他、お気づきの点があれば教えてください）

ご協力ありがとうございました。一人でも「地震」で命を落とすことがないよう活動する事が私の使命だと思い、今後とも研究をすすめていきたいと思っております。質問は以上です。

職員用アンケート用紙（裏）

る賛否（自由記述あり）、⑥災害時のクラスでの役割、⑦-1・⑦-2・⑦-3ものが「倒れてこない」「落ちてこない」「動いてこない」場所で頭や体を守る行動ができたかどうか、⑧抜き打ち避難訓練と従来までの訓練のちがい（自由記述あり）、⑨高等学校での抜き打ち避難訓練の実施率が低い要因（8項目から選択、自由記述あり）、⑩今回の訓練でよかったところ、悪かったところ、⑪今後の防災訓練について、という質問内容を作成した。

職員用（教師用）のアンケート用紙では、①勤務校の校種、②性別、③年齢、④主たる職務、⑤教師としての勤続年数、⑥-1地震速報が聞こえた時にいた場所、⑥-2人数、⑥-3最初にした行動、⑥-4その際に感じた危険、⑦災害時の分担業務、⑧抜き打ち避難訓練または類似した訓練経験の有無、⑨抜き打ち避難訓練と従来までの訓練のちがい（自由記述あり）、⑩抜き打ち避難訓練の実施に対する賛否（自由記述あり）、⑪高等学校での抜き打ち避難訓練の実施率が低い要因（8項目から選択、自由記述あり）、⑫今回の訓練でよかったところ、悪かったところ、⑬今後の防災訓練について、という質問内容を作成した。

生徒と教師のアンケート調査にはそれぞれ対応した項目を作成し、生徒用のアンケートは訓練終了後に各教室で担任教師の監督下で、教師用のアンケートは生徒が下校した後で記入してもらった。所要時間はそれぞれ5～10分程度である。

4. 結果と考察（1）

はじめに生徒のアンケート調査の結果から述べていく。

（1）学年、人数、性別など

アンケートに回答した生徒側の人数は以下の表1、表2に示した。全体の人数は445名となっており、男子が若干多くなっていることが分かった。

（2）地震速報の際どこにいたか

休み時間に入って5分後の訓練開始であったため、多くの生徒は教室での訓練となった。そのため、369名（83%）の生徒が「教室にいた」と回答している。また、1クラスのみがその

表1 学年別の人数と性別

学年	人数	性別	人数
1年	149	男子	277
2年	148	女子	168
3年	148		
合計			445

表2 各学年の男女の人数内訳

1年			2年			3年		
男子	女子	合計	男子	女子	合計	男子	女子	合計
119	30	149	84	64	148	74	74	148

前の授業の関係でコンピュータ室にいたこともあって36名が「コンピュータ室」、残りの40名が「廊下」と回答していた。高校生になると小学生や中学生とちがい運動場など、外で遊ぶことが少なくなるため、このような結果になったと思われる。しかしながら、教室以外の場所にいる際にどのように避難するのが適切かを考えるためには有効であると考えられる。

(3) 何人でいたか、最初に何をしたか、どのような気持ちだったか

何人でいたかという人数についての性別・学年でクロス集計を行った結果、学年で有意差が見られた ($\chi^2=16.068$, $df=8$, $p<.05$)。ほとんどの生徒が教室にいたこともあって、80%以上が10人以上でいたと回答しているが、3年生は1年生に比べると、10人以上で共にいることが少ない傾向にあり、むしろ少人数で固まっていることが分かる(表4)。

次に、最初に行った行動についてのクロス集計を行った結果、性別に差はなく、学年で有意差が見られた ($\chi^2=70.471$, $df=14$, $p<.00$)。この理由は「教室に戻った」3年生が多いからであったと考えられる。最初にした行動については「机や椅子の下に隠れた」と回答した生徒が約半数になっている。「放送を聞いた」「冷静に周りの様子を見た」と回答したのが51名、「周りと話した」「友だちとコミュニケーションをとった」と回答したのが23名、「スマートフォンを触っていた」「ゲームをしていた」が21名、「教室に戻った」と回答したのが43名、「何もしなかった」「何もできなかった」が33名となっている。その他の回答では、「プリントを見る」「絵を描いていた」など、個々人の作業を継続していた生徒がいることが確認できた。(表5)

まず43名の生徒たちが地震速報と同時に教室に戻っていた。「地震が起こったときは机や椅子の下に身を隠す」というのは、これまでの小学校や中学校で学んできた対処法であり、43名が行った行動は身につけた経験を実行したものである。しかしながら、緊急地震速報がなり、後数秒で地震が来るという中で「教室に戻る」という行為が必ずしも適切であるかは考えなければならない。同様に、机や椅子の下に隠れた生徒の中には、半ば反射的に隠れた者も少なく

表3 クロス集計(性別)

	1人	2人	3人	5人以上	10人以上
男子	12	15	7	11	231
女子	10	10	5	5	138
合計	22	25	12	16	369

表4 クロス集計(学年)

	1人	2人	3人	5人以上	10人以上
1年	7	8	3	2	129
2年	8	4	4	3	128
3年	7	13	5	11	112

ない。それは小学校時代から「机の下に隠れる」ということを当たり前のように行ってきたからであるが、これは地震の際に転倒落下物が少なく閉じ込められにくい場所、いわゆる「安全ゾーン」を確保するための行動であり、必ずしも机の下が適切であるとは限らない。本来、抜き打ち避難訓練では、生徒全員が必ず教室にいるとは限らないため、安全ゾーンはどこなのかをそれぞれの生徒が考えることが求められる。さらに、咄嗟のとき「どのような気持ちだったか」という質問のクロス集計では学年に有意差が見られた ($\chi^2=26.0877$, $df=6$, $p<.00$)、どの学年でもほとんどの生徒が抜き打ちでの避難訓練に「びっくりした」と回答しており、多くの生徒にとって抜き打ち避難訓練は効果があると見ることができるだろう。また、有意差は見られないものの26名の生徒が「何をしていたかわからなかった」と回答している。先ほどの

表5 クロス集計（性別）

	机, 椅子	放送, 冷静	コミュニケーション	スマホ, ゲーム	教室	何もできない	その他	未記入
男子	129	34	16	16	21	25	24	12
女子	90	17	7	5	22	8	15	4
合計	219	51	23	21	43	33	39	16

表6 クロス集計（学年）

	机, 椅子	放送, 冷静	コミュニケーション	スマホ, ゲーム	教室	何もできない	その他	未記入
1年	69	28	7	5	5	12	19	4
2年	91	12	7	10	3	9	10	6
3年	59	11	9	6	35	12	10	6

表7 どのような気持ちだったか（クロス集計）

	びっくりした	あせった	何をしていたかわからなかった	その他
男子	182	20	16	56
女子	115	11	10	32

表8 どのような気持ちだったか（クロス集計）

	びっくりした	あせった	何をしていたかわからなかった	その他
1年	98	7	10	34
2年	117	11	2	16
3年	82	13	14	38

何もできないと回答した生徒同様、咄嗟のときには「何をすればいいかわからない」という生徒たちが一定数出ることになるのである。

これらの結果から、従来までの避難訓練のように「放送があれば机の下に隠れる」という最も基本的な行動ができなくなるほどに驚いたり、焦ったりということが起こりうることを教師側も把握しておくことが求められる。これに合わせて緊急地震速報の際に感じた危険は、ほとんどが「ものや電気が落ちてくる」「机の上のものが落ちてくる」という落下物に関する内容、「窓ガラス割れる」「扉が倒れる」「棚やロッカーが倒れる」という地震による二次災害の倒壊に関する内容であった。この点については生徒の多くが同様の意見を共通して持つことができていると評価できるだろう。

(4) 訓練の経験の有無と抜き打ち避難訓練への賛否

抜き打ち訓練やそれに類似した訓練を経験したことがあるかという質問に対して、416名の生徒が従来までの避難訓練しか経験していないと回答した。なお、抜き打ち訓練を経験したことがあると回答した17名の生徒の中には、今回の訓練を参入している可能性があり、ほぼ全員が抜き打ち訓練は未経験であると言えるだろう。

抜き打ち避難訓練を実施することについて、クロス集計の結果、有意差はみられなかったが、343名の生徒が賛成しており、「緊張感がある」「本番に近い形で訓練ができる」「自分たちが本当の地震が来たときにどのような対応するのか良くわかる」という理由が多く見られた。反対もしくはどちらとも言えないと回答した生徒は、その理由に「心構えができない」「焦るから嫌だ」「怖い」「何時来るか分からなくて面倒である」といったものを挙げていた。どちらも抜き打ちであるがゆえの内容になっており、いつ生じるか分からない災害に対処する方法を身につけるためには一定の効果があることが確認できたと考えられる。

表9 訓練経験の有無（クロス集計）

	通常の訓練	抜き打ち訓練
男子	254	13
女子	162	4

表10 訓練経験の有無（クロス集計）

	通常の訓練	抜き打ち訓練
1年	129	14
2年	142	2
3年	145	1

表11 実施の賛否（クロス集計）

	賛成	反対	どちらとも言えない
男子	205	8	42
女子	138	4	16

表12 実施の賛否（クロス集計）

	賛成	反対	どちらとも言えない
1年	122	4	17
2年	111	3	22
3年	110	5	19

(5) 災害時の役割

アンケートの結果を見ると、ほとんどの生徒は災害時の役割が決められていないことが分かる。クロス集計の結果、有意差は見られなかったが、役割があると回答した生徒も自由記述では点呼、教室の鍵を閉めるといったいわゆる学級委員としての仕事を挙げており、学級では災害時の行動のほとんどが各個人に任されていることが確認できた。

いつ起こるか分からない災害への対処についてより考えるためには、生徒一人一人が災害時に自ら果たす役割を意識しておくことが求められるのではないだろうか。未就学児や小学生は、災害時にはまず自分の身を守ること、すなわち「自助」が優先される。しかしながら、中学生や高校生ではそれに加えて、自分以外の他者を助けること、すなわち「共助」が求められる。そのためには、災害時に果たすべき役割を事前に考え、生徒たちに日常的に意識させておくことが必要であろう。これについては、今後の課題の中で省察する。

表 13 災害時の役割の有無（クロス集計）

	役割あり	役割なし	わからない
男子	16	222	31
女子	4	150	13

表 14 災害時の役割の有無（クロス集計）

	役割あり	役割なし	わからない
1年	8	122	16
2年	5	124	16
3年	7	126	12

(6) 災害時のチェック項目

質問紙では、物が「倒れてこない・落ちてこない・動いてこない」場所で、姿勢を低くして頭や体を守る行動ができたかどうかについて、3項目でチェックしている。

表 15～表 20 までの内、有意差が確認できたのは表 18 の「姿勢を低くすることができた」($\chi^2=15.463$, $df=2$, $p<.00$)、表 20 「頭・体を守るすることができた」($\chi^2=10.665$, $df=2$, $p<.00$)であった。抜き打ち避難訓練では、ものが「倒れてこない・落ちてこない・動いてこない場所を見つけて移動できた」生徒は 235 名、「姿勢を低くできた」生徒は 247 名と約半数に留まっており、生徒たちが最もできたと考えている「頭・体を守るとした」という項目についても 299 名となっている。この結果からは「姿勢を低くする」「頭・体を守る」ことはできているが、「ものが倒れてこない・落ちてこない・動いてこない」場所を意識することが十分にはできていないことが明らかになった。姿勢や頭を守ることについては、従来までの避難訓練で十分に取り扱われてきた内容であり、これらについては多くの生徒が身につけていると考えられる。しかしながら、ものが倒れる等のことを想定しないままに机の下に隠れるという行為をいわば機械的に行ったことから考えると、突発的に起こりうる災害時には半数程度の生徒しか柔軟に対応できないと言うこともできよう。学校安全の充実のためには生徒たちが咄嗟の事態でも自らの判断で行動することができる力を育てていかなければならない。抜き打ち避難訓練のよう

表 15 ものが倒れてこない等（クロス集計）

	できた	できなかった
男子	147	125
女子	88	79

表 16 ものが倒れてこない等（クロス集計）

	できた	できなかった
1年	72	74
2年	86	60
3年	77	70

表 17 姿勢を低くできた（クロス集計）

	できた	できなかった
男子	159	113
女子	88	79

表 18 姿勢を低くできた（クロス集計）

	できた	できなかった
1年	79	66
2年	100	46
3年	68	80

表 19 頭・体を守ることができた（クロス集計）

	できた	できなかった
男子	181	92
女子	118	50

表 20 頭・体を守ることができた（クロス集計）

	できた	できなかった
1年	96	50
2年	114	33
3年	89	59

な実践的な訓練を積極的に導入し、毎回の振り返りを充実することで生徒たちの意識を日常的に高めていくことができるだろう。

(7) 高校での実施率が低い理由

高校で抜き打ち避難訓練のような実践的な訓練が未だに十分に実施されていない理由について生徒は表 21 のように考えている。「授業時間の確保が優先」「以前からの内容で十分」という意見が多く、次いで「高校生にもなって真剣に参加できない」「カリキュラム上の時間の確

表 21 高等学校での実施率が低い理由

項目（複数回答可）	人数	%
授業時間の確保が先決	132	22.0
以前の内容で十分	121	20.2
高校生にもなって真剣に参加できない	109	18.2
カリキュラム上時間の確保が難しい	98	16.3
面倒である	77	12.8
必要性を感じない	47	7.8
想定できない内容に対する不安	16	2.7

保が難しい」と考えていることが分かった。また、「面倒である」「必要性を感じない」という意見も一定数見受けられたことは、高校生のリアルな意見が反映された結果であろう。

教師側は抜き打ち避難訓練を実施するにあたり、このような考えをもっている生徒が一定数いるということを理解した上で行わなければならない。そして、実践的な防災訓練をはじめとした防災教育の意義を生徒たちに伝えるための事前・事後指導の方法を学校の特徴を踏まえて考えていかなければならないのである。

(8) 抜き打ち避難訓練で良かった点・悪かった点

自由記述で記入してもらった良かった点については、「実施の賛否」の項目でも述べたように「より本番に近い形である」「緊張感をもって訓練ができる」といった意見がほとんどであった。一方で、今回の訓練で生じたいくつかの問題点も明らかになった。第一に、「放送が聞こえなかった」と回答した生徒が50名程度いたことである。あるクラスでは放送が鳴らず、他の学級の動向を見て避難訓練が始まっていることに気が付いたところがあったようである。これは学校の設備に不備があったことを示しており、生徒たちの安全で快適な学校生活を守るためには即座に改善されるべきものである。とはいえ、この事例は抜き打ち避難訓練によって偶発的にでもこのような学校の設備上の課題を明らかにすることも示された。第二にあるクラスで「教師が間違っただけで1日目に避難訓練があることを伝えてしまった」という事態があったことである。具体的な時間は示されていないが、生徒の回答には「先生が間違っただけで緊張感がなくなった」という意見もあり、教師側も抜き打ち避難訓練を十分に意識した上で取り組むべきであるということが示唆される結果となった。最後に「訓練だと分かった瞬間にやる気がなくなっている人がいる」「私語が多かった」「移動のときにしゃべりながら歩いている人がいた」という訓練への姿勢に関する問題点が多数挙げられていた。これは学年やクラスを問わず指摘されていた内容であり、従来までの避難訓練と同じく「訓練である」と分かった後の生徒のモチベーションの維持は今後も課題の1つとなるだろう。先述の実施率の低さでも指摘されていた通り、面倒である、必要性を感じないと考えている生徒が一定数いるならば訓練中の私語が増えることは容易に予想できるが、これを改善する指導法としては「より一層リアルな訓練ができるような体制を整備する」といったことが考えられる。具体的には、地震の後の障害物を実際に再現し、校内の避難経路を制限する、煙体験と併用して実際の火災を再現するといったものである。地震の二次災害まで想定した訓練を実施することでより実践的な訓練を行い、生徒の訓練への真剣さを高めることも必要であろう。

(9) 今後の防災訓練

生徒たちの自由記述では、水害対応や津波を想定した高所への避難訓練、部活動や清掃の時間などのもっと色々な場所にいる時に実施する、火災や不審者の対応などの意見が見られた。

これは一定数の生徒たちが従来までの避難訓練以上により実践的な訓練を求めていることを示しており、今後の訓練を考える際の参考になると思われる。

ここまで生徒へのアンケート調査の結果を整理し、分析してきた。生徒たちの中には今回の抜き打ち避難訓練のような実践的な内容に意義を感じてくれている者もあり、より実践的な訓練は大多数の生徒たちにとって非常に新鮮であり、日常的に防災を意識する一助になったと考えられる。避難訓練中の私語や一部のやる気が十分に発揮できない生徒などの問題点は見られたが、筆者は抜き打ち避難訓練が今後も学校教育現場で実践していくに値する内容であったと考えている。今後は、事前・事後指導の徹底や長期間での抜き打ち避難訓練、多様な訓練の実施などの課題を見据えて活動を継続していきたい。次章では、教師のアンケート調査結果を踏まえて考察を行う。

5. 結果と考察 (2)

ここでは教師のアンケート調査の結果について述べていく。

(1) 校種、性別、年齢など

教師は全29名であり、男性が20名、女性が9名となっていた。50代以上が17名となっていた。近年の学校教育現場で話題となっているミドルリーダー層の年齢の教師が少ないという実態が垣間見える形になっている。また、勤続年数が長く、ベテランの教師が多い学校でこのような訓練を実施できたことは、他の学校での実践つなげるための足掛かりになると考えられる。対象となった人数が少なく、ここでは個人の特定を避けるため、単純集計で結果を示す。

(2) 地震速報が聞こえた時にいた場所

実施した学校が高校であったこと、実施した時間が休み時間に入ってから5分後であったため、ほとんどの教師がそれぞれ異なった場所にいたのが特徴的であった。抜き打ち避難訓練が始まったとき教室にいた教師は4名のみであり、授業を終えた後、各学年の廊下にいた教師が4名、それ以外の教師は学年ごとの学年室、教務室、教科室、準備室に待機していた。職員室

表 22 教師の内訳

	人数		人数
男性	20	20代	6
女性	9	30代	3
		40代	3
		50代以上	17

にいた教師は2名のみとなっており、高校だからこそその配置であったと思われる。

(3) 最初に何をしたか、その際に感じた危険、災害時の分担業務

ほとんどの学校では、教師は年度当初から災害時の役割分担が決められており、教室の安全確認、生徒の避難誘導、校内の見回りなどが割り当てられている。最初の放送の後、机に隠れた、ドアを開けたなどの安全確保を行った教師が数名いたが、教室に生徒の様子を確認にいった、生徒に机の下に隠れるように指示を出した、周囲の安全を確認したなどの行動も確認できた。

一次対応の際に感じた危険は「ものが落ちてくる」「エアコンの落下」という落下物に関する内容、「窓ガラス割れる」「棚やロッカーが倒れる」という地震による二次災害の倒壊に関する内容が見られた。

しかし、今回のアンケート調査では、災害時の役割が「特に無し」と回答した教師が5名いたことが確認できた。これは災害時の役割を意識できていない教師が学校には一定数いることを示しており、一部の教師の意識改革が必要であると言わざるを得ない。教師である以上、日常的に突発的な災害が生じた際の対応は視野にいれておくことが求められるだろう。これは今後の教員研修や他の学校での実施の際にも大きな課題の1つになると考えられる。

(4) 抜き打ち避難訓練の経験の有無

教師の中で抜き打ち避難訓練またはそれに類似した訓練を経験したことがある教師は1名のみであり、未回答の1名を除けば、27名の教師が初めての抜き打ち避難訓練であった。多くの教師にとって、今回の訓練は初めての試みであり、従来までの訓練では感じられなかった新しい学びがあることが期待できる。

(5) 抜き打ち避難訓練と従来までの訓練のちがいを、実施の可否

教師の視点から見た従来までの訓練と抜き打ち避難訓練のちがいについて、実施の際の心構えや緊張感、実際に災害が起こったときの対応に近い（生徒のそばに担任がいない、避難の条件が整っていない、避難経路が異なるなど）という意見があった。生徒がとまどいながら集合している様子を見て、生徒の実態を感じた教師もいたことが確認できた。

抜き打ち避難訓練の実施の可否については賛成と回答した教師が23名、反対は0名、どちらとも言えないと回答した教師が6名となっていた。自由記述では、「目的等に差異があり、共に意義はある。抜き打ちではよりリアルではあるが、ストレスや発達障害者への対策等リスクも多い、それぞれの意義を明確にして実状に応じた実施が望ましい。」「抜き打ちであっても3日間であると言っているのも本当の抜き打ちではない」「抜き打ちも完全に無予告でなければちがいを感しない。」といった意見も散見された。個人情報に配慮して詳細を述べ

ることは避けるが、実際に事前の打ち合わせでも特別の支援が必要な生徒への対応は課題として挙げられていた。そのような生徒が抜き打ち訓練で日常とは異なった環境に置かれた際にパニックを引き起こすなどの状況が危惧されたのである。現在の学校では、特別の支援が必要とされる生徒の認知が進んでおり、そのような生徒への配慮を忘れてはならない。しかしながら、いつ起こるとも分からない災害への対応を考えるのであれば、そのような生徒がいることも視野に入れて教師が事前に対策を講じる、生徒たちに協力してもらい災害時には共助することを指導するなどの事前の指導を徹底しておくことが必要になるだろう。また、テスト期間のような限られた期間ではなく、より期間を広げて実施するという意見が見られたことは、今後の訓練の発展につながるものであったと考えている。

(6) 高校での実施率が低い理由

高校で抜き打ち避難訓練のような実践的な訓練が未だに十分に実施されていない理由について教師は表23のように考えている。「授業時間の確保が先決」「以前からの内容で十分」という意見が多く、次いで「高校生にもなって真剣に参加できない」「カリキュラム上の時間の確保が難しい」と考えていることが分かった。また、「面倒である」「必要性を感じない」という意見も一定数見受けられた。これは高校教師の意識を如実に表した結果であろう。しかしながら、防災教育が日常的に取り組むべき喫緊の課題であることを教師一人一人が意識すること、抜き打ち避難訓練のような実践的な活動の事前・事後指導を徹底することで生徒が自ら考え行動することができる力を身に付けることができるという実証的なデータを示すことで、教師の意識改善も可能であると考えられる。

(7) 抜き打ち避難訓練で良かった点・悪かった点、今後の防災訓練への気づき

抜き打ち訓練で良かった点は、やはり緊張感や生徒の緊急時の対応が目に見えたことである。しかしながら、課題も多く、廊下での私語や一部の教室で放送が流れなかったこと、集合

表23 高等学校での実施率が低い理由

項目（複数回答可）	人数	%
授業時間の確保が先決	10	34.5
以前の内容で十分	5	17.2
高校生にもなって真剣に参加できない	8	27.6
カリキュラム上時間の確保が難しい	3	10.3
面倒である	4	13.8
必要性を感じない	2	6.9
想定できない内容に対する不安	0	0.0

までに緊張感が薄れていた場面が見られたことなどが指摘された。さらに、教師には時間が知らされていたことで完全な抜き打ちではないのではないかという指摘もあった。また、ここでも特別な支援を要する生徒がおり、事前にどのくらい伝達しておくか担任の配慮が必要になることが課題に挙げられた。

最後に今後の防災訓練については、従来までの抜き打ちではない避難訓練の必要性が述べられていた。教師の中には、従来までの避難訓練も避難経路の確認や避難手順の確認には必要であると考えていることが分かった。これは抜き打ち避難訓練を行う前の事前学習として、年度初めの早い段階で避難経路や避難手順に関する指導を行うことで対応することができると考えられる。次に、抜き打ち避難訓練と同様により実践的な訓練として、大雨や河川の氾濫などへの対応として高いところへの避難する訓練、部活動や清掃の時間など生徒がよりバラバラの場所にいるときに実施する避難訓練、管理職以外が知らない（教員にも知らせない）抜き打ち訓練、校外での避難訓練、火災や不審者侵入対応の訓練などが挙げられた。さらに、注目すべき意見として「学期はじめに文書で保護者に通知して予告なしで行う抜き打ち訓練」というものがあつた。長期間を見越して行うことで生徒たちはより実践に近い避難訓練となることが期待できる。

教師側の意見を見ても、抜き打ち避難訓練は生徒だけでなく教師にとっても学びの多い訓練になっていると思われる。学校教育現場でより一層、安全教育が推進されていく体制をつくるためには今後も積極的にこのような訓練を導入していくことが必要なのではないだろうか。

6. まとめと今後の課題

これまでの結果と考察を踏まえ、本研究の今後の課題について述べる。

(1) 「抜き打ち避難訓練」という名称の変更

学校教育現場で抜き打ち避難訓練を実施するにあたり、当該学校の管理職との打ち合わせの際、学校教育現場では「抜き打ち」ということばに対して否定的なイメージがあることを指摘された。実際に職員会議で配布された資料では、抜き打ちから「無予告避難訓練」へと変更された。こういった学校教育現場の実態を踏まえ、今後の活動の普及のためには指導する側の教師にもより受け入れられやすい名称への変更を検討することが求められる。

(2) 年間指導計画への導入

防災教育を学校教育現場、特に高等学校で普及するためには、年間指導計画への導入が不可欠である。特に新学習指導要領が実施されていくこれからの学校教育現場では、児童生徒の姿や地域の実態を踏まえて各学校が設定する教育目標を実現するために具体的な教育課程を編成

し、実施、改善していく「カリキュラム・マネジメント」¹³⁾が求められている。実施する日程については開示しないまま、抜き打ちの避難訓練を年度内に実施するという計画を立て、教師のアンケート調査結果にあったような「保護者への年度当初のプリント配布による理解を求める」「教師にも日程を知らせないで管理職などの一部の人が知っている」というより実践に近い形での抜き打ち避難訓練の実施を検討することが必要であろう。学校安全や防災教育という各教科との関連が明確であり、社会全体の課題となる内容を軸にすることで学校だけでなく家庭や地域との協働、「チーム学校」の実現など、新しい学校教育に適応することができると思われる。

(3) 管理職や教員へのインタビュー調査の実施

本研究では、アンケート調査の分析を用いた考察を行ってきた。しかしながら、勤務する教員の数の問題から個人の特定を避けるため、クロス集計による分析等を十分に行うことができていないという問題があった。今後、活動を継続的に実施する際には、教員への半構造化インタビュー調査等を通して、より実証的なデータを示すことを目指すものである。また、学校は管理職の姿勢や考え方に経営が大きく影響される場所でもある。それゆえに、管理職の安全教育や防災教育への意識を確認していくことが重要であり、それらを分析し、アンケート調査の結果と比較することでより具体的な結果を示すことにつながると考えられる。

(4) 事前事後指導の充実と多様な訓練の実施

教師からのアンケート調査で指摘されたように、従来までの避難訓練は「避難経路の確認」には一定の効果を挙げていた。効果的な抜き打ち避難訓練を実施するためには、避難経路を事前に児童生徒が理解し、避難の際に生じる危険や不測の事態について想定することが求められる。今後の発展的な活動として、事前指導として4月当初の早い時期にクラスもしくは学年単位で避難経路の確認や避難中に生じる危険性について確認する授業を実施し、その後抜き打ち避難訓練を行い、振り返りなどを行うことでより一層教育効果を高めることが期待できる。その際、教師の指導に特別活動や総合的な学習の時間を活用することも考えられる。

さらに、従来までの避難訓練に加えて、不審者への対応や津波、火災、その他の自然災害などのさまざまな状況に対応した訓練を実施しておくことも必要である。そして、地震の二次災害としての火災や津波といった複合型の避難訓練を実施することで児童生徒の防災への意識を高めることも重要であろう。これについては、授業参観時の避難訓練の実施など、これまでになかった新しい形の訓練を行うことで一層の発展を期待できる。

(5) 支援を必要とする児童生徒への対応と訓練

「特別な支援が必要な生徒への対応が難しい」「災害時の役割が明確でない」と回答した教師

のアンケート結果を踏まえて、教師を対象とした抜き打ち避難訓練も必要であろう。近年、特別な支援を要する児童生徒への対応は学校の課題の1つである。しかしながら、災害がいつ起こるか分からない以上、学校はそのような児童生徒への支援の方法も視野にいたした訓練を実施していく必要があるだろう。また、より緊張感をもった訓練を行うために教室に逃げ遅れた児童生徒がいる状況を設定した抜き打ち避難訓練など、教師も児童生徒と共に考えて行動することができる訓練を今後は検討していくことが必要であると思われる。

(6) 災害時を想定した係活動の事前分担

児童生徒や教師に防災への意識と責任を持たせるための方法の1つとして、本研究では今後の課題に「災害時を想定した係の事前分担」を提案したい。

係活動は、子どもに責任感を持たせ、自主性を伸ばすための取り組みとして、主に小学校を中心に学級運営の一環として導入されている。担任は、クラスの実態に応じて、給食係や掲示係などさまざまな係を設置し、多くの場合、児童生徒は学期ごとに係を変えながら活動に取り組むのである。¹⁴⁾

本研究では、そのような従来までの係活動は継続させたまま、学級に「災害時の係」を別途設定することを提案する。この災害時の係は、特定の事情がない限り年間を通して変更することなく最初に決められた係を生徒は1年間継続する。そこには「避難誘導係」「点呼係」「確認係」など、災害時に求められる作業が細分化されており、教師は避難訓練などの際には災害時の係に対して指示を出すのである。年間を通して係を継続する理由は、1人の児童生徒が責任をもって災害時でも活動することができる意識を高める狙いがあり、それ以上に年間を通して継続することで少なくともその災害時の係に関する知識や技能を児童生徒が身につけることができるからである。

ところで、高校ではそれほど係活動は活発ではない。多くの場合、教科ごとの係などが設置されるに留まっている。しかしながら、高校でも災害時の係を設置することで、防災への意識を高め、生徒へのアンケート調査の結果にもあった「高校生にもなって真面目に参加できない」といった避難訓練の課題を解決することにも貢献できると考えられる。

ここまで、抜き打ち避難訓練後のアンケート調査の結果を踏まえた考察から得られた今後の課題について述べてきた。近年、教師の勤務実態が問題視され、学校教育への風当たりは強くなっている。たしかに学校は、日々の生徒指導や校務分掌、進路指導などの時間を確保する必要性から教科ではない学校行事に十分な時間を割り当てることのできない現状がある。特に高校では、小・中学校に比べて通学範囲が広く、地域に密着した一体型の訓練を実施することが難しくなっていることなども実践的な訓練の定着を妨げる要因になっているばかりか、想定できない事柄に率先して取り組む体制が構築されておらず、高校における実践的な訓練の早期定着は喫緊の課題である。いうまでもなく「最終的に各個人の防災意識に頼る他ない」というよ

うな学校安全の体制では不十分であり、教師は社会全体に防災の意識を定着させる基盤づくりとして、日常的に児童生徒と共に防災への備えを行うことが求められている。学校教育が厳しい時代を迎えようとしている中、教師一人一人が学校安全に対して自らの果たす役割を自覚し、児童生徒の安全や防災の意識を高める指導をすすめていくこと、これが最も大切なことであろう。

以上、本研究で取り上げた抜き打ち避難訓練のような活動を通して、今後の安全教育や防災教育がより一層促進されることを期待して、本研究の締めくくりとしたい。

注

- 1) 大分県教育委員会「防災教育実践事例集」(閲覧日: 2018年9月13日)
<https://anzenkyouiku.mext.go.jp/todoufukuken/data/44oita/44-03/44-03-1.pdf>
- 2) 秦康範・酒井厚・一瀬英史・石田浩一「児童生徒に対する実践的防災訓練の効果測定—緊急地震速報を活用した抜き打ち型訓練による検討—」『地域安全学会論文集』No.26, 地域安全学会, 2015年, pp.1-8。
- 3) 秦康範『緊急地震速報を活用した予告なし避難訓練ガイド』山梨大学地域防災・マネジメント研究センター, 山梨防災教育研究会, 2017年。
- 4) 文部科学省「学校安全参考資料「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育」(閲覧日: 2018年9月13日)
http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/anzen/1289310.htm
- 5) 文部科学省「学校安全の推進に関する計画について」(閲覧日: 2018年9月13日)
http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/anzen/1320286.htm
- 6) 学校保健安全法 (閲覧日: 2018年9月13日)
http://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=333AC0000000056#A
- 7) 文部科学省, 上掲書, 2012年, pp.6-7。
- 8) 文部科学省「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(閲覧日: 2018年9月13日)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm
- 9) 秦康範・酒井厚・一瀬英史・石田浩一, 上掲書, 2015年。
- 10) 秦康範「Vol.236-1 抜き打ち避難訓練と浸水想定区域内の人口の推移について」『YAFO メールマガジン VOL.93 2018年3月号』山梨総合研究所。(閲覧日: 2018年9月13日)
<https://www.yafo.or.jp/2018/03/30/9475/>
- 11) 村山良之・八木浩司「学校における防災教育の現状と課題 山形県の学校アンケート調査より」『日本地理学会発表要旨集』日本地理学会, 2008年, p.133。
- 12) 千葉県で最初に製作された『防災誌(津波編)』は, 1703年に発生した「元禄地震」を題材に, 津波被害の恐ろしさや教訓をまとめており, これまでに地震編, 風水害編という3部作が製作されている。千葉県防災危機管理部防災政策課地域防災力 向上班『防災誌』(閲覧日: 2018年9月13日)
<https://www.pref.chiba.lg.jp/bousaik/bousaisi/bousaisi.html>
- 13) 文部科学省「4. 学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策」(閲覧日: 2018年9月13日)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1364319.htm
- 14) 日本特別活動学会監修『小学校・中学校・高等学校学習指導要領対応 新訂 キーワードで拓く新しい特別活動』東洋館出版, 2010年。

※本論文は第1章, 第2章, 第4章を藤原, 第3章を国吉, 第5章, 第6章は両名が執筆を担当した。

A Study of Teaching for Disaster Prevention Education

The Effects of a Sudden Earthquake Drill in High Schools and School Safety

Keiichi KUNIYOSHI

Yasuhiro FUJIWARA

Abstract

In this study, we examined the teaching skills required by teachers to implement disaster prevention education. A questionnaire survey of teachers and students was conducted to examine the effects of a sudden earthquake drill in the high schools of Chiba Prefecture. The results enabled evacuation behaviors to be practiced, for which conventional sudden earthquake drills, limited to reaffirming set actions for ensuring safety and daily awareness, proved inadequate. Such practical exercises also enabled the development of appropriate judgment skills at the time of a disaster. In addition, the results suggested that teachers needed to extend their conscious regarding disaster prevention education towards the occurrence of sudden disasters. Based on this study, we will consider future education and teaching in high schools.

Keywords: School Safety, Disaster Prevention Education, Safety Education, Sudden Earthquake Drill, Teaching Method